



TITLE:

ワーグナーかモーツアルトか

AUTHOR(S):

木村, 健治

CITATION:

木村, 健治. ワーグナーかモーツアルトか. 西洋古典論集 2001, 別冊:
111-114

ISSUE DATE:

2001-01-31

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/68703>

RIGHT:

ワーグナーかモーツァルトか

木村 健治

人の脳に記憶として定着した思い出の断片は、さながらクリスタルガラスの粉々に割れた断片のように、一つ一つがキラキラと輝いて、雪の結晶のようにそれ自体が完結している。岡先生とのさまざまな思い出の場面を思い返す今、記憶の深い層から浮かびあがるものは、そのような場面ばかりである。岡先生とやりとりした最後は電子メールの上だった。これは1999年11月4日発信である。

この年、日本西洋古典学会は設立以来50年を数え、学会委員長として岡先生は記念講演会の挨拶をなされた。この講演会の全体を文字の形で残そうということはそれ以前から決定されていて、日本学術会議の研究連絡委員会の委員の一人として、なりゆきから、私はとりまとめ、編集のお世話をする事になってしまった。そこで、岡先生をはじめとして、逸身研連委員長、講演をして下さった柳沼先生、伊藤先生、藤澤先生に原稿の提出をお願いしたのだった。6月末のことであつたろうか。それに対して、次のようなメールを岡先生から頂いた。7月8日のことである。

メール有難うございました。講演会記録集については大変お世話になって
います。執筆要領はお決めになったとおりで結構と思います。小生の「挨拶」
の件ですが、講演会当日の挨拶（但し少し手を加えたもの）でお許し
頂ければ幸いです。400字詰で約3枚になります。原稿（ワープロ）は近
日中にお届けいたします。メールは大抵毎日見っていますが、この2、3日多
忙のためパソコンに向かう暇がなくお返事が遅くなりました。梅雨明け間
近の蒸暑い日がしばらく続きそうです。御自愛下さい。

講演記録集の出版の形態に関しては二転三転して、結局、岩波書店の『思
想』に掲載される運びとなり、最後の11月4日のメールとなったのである。

Eメール有難うございました。講演記録集の件は了承いたしました。『思

想』であれその他の形であれ、学会50周年記念ということさえ（単に『思想』掲載論文としてではなく）明確にして頂ければ幸いです。

最後まで強い責任感をもって、しかも、気配りをしておられたことがひしひしと伝わってくるメールである。因みに岡先生のハンドルは mmpagos であり、ウインドウズ派であった。この頃、先生のお体はどのようなものであったのだろうか。岡先生はご自分のお体のことについては何もおっしゃっていなかったけれど、今から考えれば、良好とはとても言えない状態ではなかったろうか。

一体、岡先生とはじめてお会いしたのはいつだったのだろうか。思い出してみれば、それは私が2回生の時、今から34年も前のことではなかったか。水野先生にラテン語を習っていて、9月頃に、西洋古典文学科に進む決心をした、その年の、あれは12月頃だったろうか。水野先生がお誘い下さって、楽友会館で開かれていた西洋古典教室の研究会に出席した。ちょうど柳沼先生が発表をされた時であった。演題とかは全く忘れてしまったが、その中で、ギルバート・ハイエットの『古典の伝統』等を引用されながら、ルネサンスの知識人でラテン語はともかくギリシア語をまともに読めた者は驚くほど少なかったというような意味のことをおっしゃったことだけは記憶している。この発言はご発表の本題の中ではなくて、発表後の質疑応答のさいの発言だったかもしれない。このときに私は水野先生に教室の諸先輩に紹介された。ただし、その中に岡先生がおられたかどうかは、全く、記憶していない。可能性として、これが最初であったかもしれないというぐらいである。あとは、楽友会館の高い天井と暗い室内が映像として頭の片隅に残っている。確実に岡先生とお会いしたと言えることができるのは、私が3回生になって、そのころ同志社大学におられた岡先生が非常勤講師として京大に教えに来られていた時である。授業はホメーロスのモチーフ分析であった。こちらはまだギリシア語を始めたばかりで、先生の密度の濃い授業にはほとんどついていけなかった苦い思い出が残っている。心優しい岡先生のことであるから、レポートは、ホメーロスに限定しないから、モチーフ分析を適用するように、ということであった。このとき私は、日本の神話を資料にして、『古事記』と『日本書紀』の同一神話の記述の相違に着目してモチーフ分析らしきものを行って単位を頂いたようなことを覚えている。ちょうどこの頃、岡先生は門真から高槻へ転居されようとしてい

て、レポートの送付先に関してコメントをうけたような記憶がある。

それから何年かして、岡先生は同志社から京大に移ってこられ、私は先生のホメーロスの演習に出た。『オデュッセイア』であったことが思い出せるのは、確か学年末の試験に『オデュッセイア』の第1巻を初めからできる限り多数の行を暗記して書くようにということだったからである。私は30行か50行ぐらいを暗記したような気がする。今はもう最初の10行すら怪しくなっているが。大学紛争直後のこの授業で、伊藤さんと安村さんが授業に出ておられたように思う。東館の先生の研究室で授業は行われた。この時先生は語学の修得には暗記が非常に重要であることを強調されていた。なんでも、同志社大学で法学部のドイツ語の先生として教えておられた時も、その方針をとっておられ、法学部の学生の中からドイツ語の先生になった人がいることを嬉しそうにお話になっていた。

岡先生に教室で教えを受けたのは、私の記憶によれば、この2年間だけのようである。1973年から1975年まで私はミシガン大学にいたし、帰国して半年後には大学院を単位終了退学して大阪樟蔭女子大学で教え始めたからである。しかし、西洋古典の教室のことである。教室外でも数え切れないぐらいさまざまな教えを受けた。あれはいつのことだったろうか。教室恒例のハイキングで清滝の方に行ったときだったか。ハイキングを終えて、みんなでビールということになり、川沿いに席を借りて、わいわいといろんな話をしていたときのこと。多分、先輩の藤村さんもそばにおられたように思う。話は音楽のクラシックの話になった。好みの作曲家に話が及んだときに、岡先生はワーグナーを挙げられ、多分、藤村さんがモーツアルトを挙げられた。その時、岡先生はワーグナー弁護の弁論を張られ、「モーツアルトなんか、あんなのは日本のお茶漬けですよ」とおっしゃったのである。このコメントは強烈に私の頭に刻みつけられることになった。私はモーツアルト派であったからである。しかし、考えてみれば、岡先生の学問に対する態度がドイツ流——こういう粗雑な分類を許されればの話であるが——であったことは私だけの印象ではないだろう。先生の重厚にして精密な学風は、そのご性格から生み出されたものではあるが、ドイツへ留学されたことはさらにそれを確実なものとして固定したに違いない。そして、これが先生のワーグナー好みへとつながっていると考えるのは自然なことであろう。つまり、音楽の好みから、生活、学問と一本筋が通り、そこに、論理的破綻が全く見られない、それが私から見た岡先生像なのである。

そこからすれば、演劇学と西洋古典学の間を行ったり来たり、落ち着かなく動き回っている私のような存在は岡先生の目にはどのように映っていたのであろうか。あと何年かして、私の魂が岡先生の旅立たれたところへ辿り着くことができたとしたら、そのことを真っ先に尋ねてみたいと思う。しかし、おそらく先生はただ微笑みを浮かべるだけで、直接的な答えは返していただけないであらうが。